

# 第 85 回九州真菌懇話会

日 時 平成 30 年 9 月 16 日 (日) (9 : 20 ~ 11 : 20)

学 会 場 KMM ビル 4F 大会議室  
〒802-0001  
北九州市小倉北区浅野 2 丁目 14 番 1 号  
電話 093-511-6450

産業医科大学皮膚科学教室  
〒807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘 1-1  
電話 093-691-7445  
FAX 093-691-0907

## お知らせ

1. 参加費 1,000 円です。
2. 発表時間は演題 6 分、討論 4 分です。時間厳守をお願いいたします。
3. 発表は PC プレゼンテーションのみとなっております。映写は一面です。発表 20 分前までに会場入り口の「演者受付」にお越しの上、試写してください。
4. 託児室を地下 1 階に準備いたしました。事前にお申込みいただいている先生は地下 1 階第 6 会議室でお手続きください。
5. 終了後に幹事会を開催いたしますので、幹事の先生方は 4F 第 1 会議室にお集まりください。
6. 会場および周辺の有料駐車場は大変混雑が予想されます。公共交通機関でのご来場をご検討ください。

## 第 85 回九州真菌懇話会プログラム

受け付け開始

9 : 00

一般演題 1

9 : 20～10 : 00

セミナー

10 : 00～10 : 50

「爪白癬治療におけるダーモスコピーの活用」

関西労災病院 皮膚科  
部長 福山 國太郎先生

共催：科研製薬株式会社

一般演題 2

10 : 50～11 : 20

幹事会

11 : 20～11 : 40

4階 第1会議室

1. 小児に生じた *Microporum canis* によるケルスス禿瘡の一例

○板村美沙、山本佳世、吉岡はるな、岡田悦子、中村元信 (産業医大)

9歳男児。初診1か月前より頭部から頬部に痒痒を伴う紅斑が出現し、近医でステロイド外用加療されるも増悪し当科を紹介され初診した。右側頭部に鱗屑を付す紅斑と脱毛斑を認めた。ポテトデキストロース寒天培地での培養により *Microporum canis* によるケルスス禿瘡と診断し、抗真菌薬を内服し略治した。感染源特定のため接触した動物の真菌培養を行った。小児頭部白癬は本邦で明確な治療基準がなく、今後症例の蓄積が望まれる。

2. 二次感染により皮膚潰瘍を生じたケルズス禿瘡

○山口さやか、深井恭子、宮城拓也、山本雄一、高橋健造 (琉球大)

9歳女児、3か月前より頭部脱毛斑が出現し、頭部白癬と診断されたが、イトラコナゾール内服で改善せず当科を受診した。頭頂部に脱毛斑、鱗屑、痂皮の付着あり。直接鏡検陽性、真菌培養で *Microsporum canis* を検出した。内服を継続したが、皮下膿瘍が悪化し、潰瘍を生じた。膿汁より MSSA が培養され、二次感染と判断した。ケルズス禿瘡でも、時に抗生剤投与や外科的処置について検討する必要があると考えた。

3. 積極的な治療介入を行った *Trichophyton tonsurans* 感染症

○蓑川葉子、吉岡はるな、岡田悦子、中村元信 (産業医大)

14歳男児、柔道部員。3年来消長する脱毛斑。精査により *Trichophyton tonsurans* による頭部白癬と診断。集団感染を疑ったため中学校を訪問し部員9名および顧問の鏡検、真菌培養を実施し環境整備を行った。

4. 長崎市内一中高一貫校柔道部における頭部白癬検診

○竹中基 (長崎大)、西本勝太郎 (長崎掖済会病院)

長崎市内では、散発的に *Trichophyton tonsurans* による頭部白癬が発生している。それらの症例が属する柔道部における菌学的調査を試みたので、その結果を報告する。

セミナー（10：00 ～ 10：50）

\*\*\*\*\*

セミナー

座長 産業医科大学皮膚科学教室  
准教授 岡田 悦子

「爪白癬治療におけるダーモスコピーの活用」

関西労災病院 皮膚科  
部長 福山 國太郎先生

共催：科研製薬株式会社

\*\*\*\*\*

5. 中毒性表皮壊死症の加療中に発症し、対応に難渋したカンジダ血症の1例

○酒井貴史、坂田優、仲摩恵美、齋藤華奈実、島田浩光（大分県立病院）二日市琢良、石原あやか、山本明彦（同救命救急センター）

69歳男性。中毒性表皮壊死症を発症し、mPSLパルス療法、IVIG、血漿交換療法等による加療を行った。入院3週目には皮疹の改善を認めたが、6週目に血液培養からCandidaが検出された。MCFG、FCZ、L-AMB、VRCZ、F-FLCZを用いて対応したが、血液培養から真菌が消失するまでに1か月を要した。最終的に血中から真菌は検出されなくなったが、全身状態が悪化し14週目に死亡転帰となった。

6. ハリネズミ飼育者に生じた手白癬の一例

○伊豆 邦夫（伊豆皮膚科医院）、佐野 文子（琉球大学 農学部 亜熱帯地域農学科 動物生産科学分野 家畜衛生学講座）

症例は17歳の女性。右手にステロイド外用剤を使用したところ悪化したため当院を受診。ハリネズミの飼育歴があった。鏡検にて糸状菌を確認。手白癬と診断した。

7. Phaeohyphomycosis の2例

○櫻木友美子<sup>1</sup>、川上千佳<sup>1</sup>、瀬戸山絢子<sup>2</sup>、伊豆邦夫<sup>3</sup>、中村元信<sup>2</sup>（1JCHO九州病院、2産業医大、3伊豆皮膚科医院）

1例目は86歳女性、糖尿病で治療中。1ヶ月前から左手掌拇指球部に疼痛伴わない皮下腫瘍を自覚した。各種検査よりExophiala jeanselmeiによるPhaeohyphomycosisと診断した。2例目は80歳女性、関節リウマチで治療中。3ヶ月前から左示指と小指に皮下腫瘍が出現し徐々に増大した。各種検査よりExophiala spp.によるPhaeohyphomycosisと診断した。高齢者や免疫抑制状態で皮下腫瘍を認めた場合はPhaeohyphomycosisを鑑別に診療を行う必要がある。